

## 「日本の乳癌検診の在り方 - 近未来の指針(試案)」

放射線医学総合研究所名誉研究員

NPO 法人マンモグラフィ精中委監事

飯沼 武(医学物理士)

本論文は2009年10月5日、札幌市において開催された日本乳癌検診学会において発表した一般口演を論文にしたものです。

第19回日本乳癌検診学会 検診システムフォーラム/口演 A-1

A0-001 日本の乳癌検診の近未来の在り方

放射線医学総合研究所 飯沼 武

ご意見は [t.a.iinuma3391@kjd.biglobe.ne.jp](mailto:t.a.iinuma3391@kjd.biglobe.ne.jp) にメールでお願いします。

### [1]研究の背景と目的

日本の乳癌は女性のがんの中で罹患率が最も高く、死亡数もともに増加しつつある。2008年には「がん対策推進基本計画」が策定され、がん検診の受診率の目標として、対象人口の50%を目指すことが決定された。しかし、我が国のがん検診の受診率は低く、目標を達成することは容易ではない。とくに、乳癌検診の欧米先進国のマンモグラフィ受診率は70 - 80%であるのに対し、我が国のマンモグラフィ受診率は20%程度と大きな較差がある。また、国内各地の検診の精度にもバラツキがあることが判っている。

マンモグラフィ検診は我が国でも対策型検診として、正式に認められたものであるが、受診率の向上など、改善すべき問題点も多い。

一方で、日本の乳癌検診には「マンモグラフィ精度管理中央委員会(精中委)」というNPO法人が設立されており、読影医師や撮影技師の精度や施設の技術水準を保証するために、認定制度を確立している。これは世界的にも類を見ない優れたシステムであり、日本の乳癌検診は精中委を中心に受診率向上を目指すことにより、最終目標である乳癌死亡減少を達成できると確信している。

本稿では日本の乳癌検診の近未来の在り方について筆者の試案を述べ、皆様の議論のたたき台としてもらいたい。

### [2]指針(1) - 検診の方法

検診の方法は第一に、従来のアナログ・マンモグラフィからデジタル・マンモグラフィに転換する。診断は従来のX線フィルムからモニターによるソフト・コピー診断に移行することを原則とする。また、デジタルになるのであるから、読影は一人読影をCAD(画像診断支援)で支援する方法を目指す。これにより、二重読影を置き換え、費用効果のよい検診を目指す。

### [3]指針(2) - 受診対象

まず、2010年の日本人女性の罹患率から、対策型検診では検診受診対象年齢を40-75歳に限定する。これにより費用対効果が担保できる。検診システムは現行の体制を維持する。

受診率は欧米並みに対象人口の70-80%を目指し、全国的な運動を盛り上げる。

### [4]指針(3) - 精度管理

デジタル・マンモグラフィの被曝線量は現状の2mGy以下とする。これは精中委の施設評価委員会の活動によって維持されることが考えられる。

次に、要精検率を5%以下にすることを基本とする。過去の研究によるとこの目標は十分に達成可能であると考えられる。

検診結果の把握に関しては、日本全体のがん登録の充実を目指す。これは単に乳癌検診だけ

の問題ではないが、全部位のがん検診に共通の課題であり、国全体として取り組む必要がある。また、日本全体の受診状況を知るため、住民検診だけでなく、職域検診や人間ドックの受診状況ががん登録を通じて把握することを目指す。

#### [5]指針(4) - そのほか

マンモグラフィ以外の新しいスクリーニング検査法として、超音波(US)やMRIが注目され、研究が進められている。とくに、USに関しては東北大学の犬内先生を中心とするJ-STARTが若年層をターゲットにRCTを実施しており、その成果が注目される。MRIについてはスクリーニングとして利用できるか今後の研究に期待したい。いずれにしても、まず、任意型検診で導入をして検討を進めることが必要であろう。対策型検診に移行する場合には費用効果分析など、より高度な解析を実施しなければならない。

もう一つ、重要な問題は精密検査機関の精度管理である。これは日本乳癌学会と共同でガイドライン作りを行い、全国の施設に普及しなければならない。

#### [6]考 察

マンモグラフィによる乳癌検診については世界的にも様々な議論がなされてきたし、最近でも米国のUSPSTFによるガイドラインの大幅な見直しが行なわれたことは注目される<sup>1)</sup>。

それらの状況を踏まえて、我が国の乳癌検診の近未来のあり方について私見を述べた。日本としては当面、現在の検診システムを維持すべきであり、スクリーニング検査としてはデジタルマンモグラフィとモニター診断に移行してゆくべきであると考えます。

そのもとで受診率向上は必須の条件であり、国全体として対策を考えて頂きたい。これについては欧米諸国はすでに目標を達成しており、日本人にできないはずはないというのが筆者の感想である。

精度管理はマンモグラフィ精度管理中央委員会を中心に、今後も強力に進め、全国に質の高い検診を普及したい。

最終的には、がん登録の充実により日本全体の乳癌罹患と死亡の正確な把握が可能となり、検診の効果が確かめられるようになることを期待したい。

まだ、目標はずっと先にあるが、それを目指して頑張らなければならない。

#### [7]結 論

日本の乳癌検診は発展途上であり、課題は非常に多い。とくに、受診率の向上と精度管理が問題である。本稿では近未来の日本の乳癌検診の進むべき方向について私見を述べた。

欧米諸国では少なくとも受診率に関しては目標をほぼ達している。是非、我が国の知恵を絞って理想的な乳癌検診を実現したい。皆様のご批判をお願いします。

#### 文献

- 1)US Preventive Services Task Force. Screening for breast cancer: US Preventive Services Task Force recommendation statement. Ann Intern Med.2009;151(10):716-726